

愛媛大学理学同窓会報

第13号

2023年2月



《目 次》

会長挨拶.....	2	会員の広場.....	15
学部長からのひとこと.....	3	総会報告.....	17
母校の窓.....	4	各種事業の紹介と報告.....	17
教室だより.....	11	会計報告.....	18
東京支部だより.....	14	事務局だより.....	19
関西支部だより.....	15	あとがき.....	20



コロナウイルスの早期収束を願って

会長 仲 田 秀 雄
(昭和47年卒)

愛媛大学理学同窓会会員の皆様には、平素より、会の活動および運営にご支援・ご協力をいただきありがとうございます。

今年も、毎日毎日、「コロナウイルス」の名前を見聞きしない日がないくらいです。外に目を向けますと、ロシアのウクライナ侵攻、北朝鮮によるミサイルの発射、部品等の供給不足による工業製品の生産ラインの低迷、円安、異常気象も影響しての野菜等の物価上昇、台風や積雪によるライフラインのダメージ…厳しい生活を余儀なくされています。

そもそも「コロナ」とは、皆既日食の際に肉眼で見ることが出来る太陽の外層大気の最も外側にある100万度を超えるガスの層、という認識でした。子どもの頃、太陽にはトゲトゲの線を描いた記憶があります。それに似た「冠状の構造」をもつことから由来している「コロナウイルス」。「新型コロナウイルス」が日本で初めて確認されたのが2020年。この時点で、こんなに深刻な事態となると捉えた人が何人いたでしょうか。

私が会長に就任してから、対面での「同窓会総会」は一度も開催されていません。残念に思います。今回も「紙面総会」となりました。会員の皆様には申し訳なく思います。役員会もなかなか開けず、メール等でのやりとりでした。役員さんの協力と事務局の計らいにより、ここまでこれましたことに、感謝しています。

新型コロナ感染は、私にとって決して他人事ではありませんでした。私も一昨年9月に「陽性判定」を受けました。職場のクラスター感染に伴い、該当者全員のPCR検査実施。自覚症状はまったくないに

も関わらず「陽性判定」でした。10日間ほどの「宿泊療養」(貴重な経験とポジティブに捉えることにしました)。〈体験談〉娘と孫は、検査の結果は「陰性」(よかった)。でも「濃厚接触者」として、2週間の自宅での隔離。私は10日間、指定されたビジネスホテルで軟禁状態。三度の食事(弁当)は、外出厳禁のドア付近の椅子に配布。500mlのペットボトル(水とお茶を2本ずつ)とバスタオル・フェイスタオル・足拭きマットは毎日支給。弁当箱や使ったタオル・マット類は一度閉めたら開かないケースに密封(退所後、焼却処分するらしい)。濃厚接触ではない身内からの差し入れはふりかけとインスタントの味噌汁。読むことのなかった本、テレビはつけてはいるがほとんど観てない。時間潰しはもっぱらパソコン。電話で体温・血圧・酸素濃度そして食事量の問い合わせ(毎回完食)。歩数を確保するために部屋の中を歩き回る。動物園の檻の中の動物の気持ち、少し分かったような気がする。見物人のいない「10日間限定の檻体験」でした。10日後、退所し職場復帰。多くの人に迷惑をかけてしまいました。

同窓会本部がこの状況ですから、関東と関西の2つの支部も大変だったようです。

コロナ収束の後に「あの時は大変でしたね」・「どうしてましたか?」・「頑張りましたね」と言い合える場(道後温泉にでもつかりながら)を早く持ちたいものです。

最後になりましたが、校友会・各学部の同窓会の今後の発展と、理学同窓会会員の皆様のご健勝を祈念して挨拶とします。



理学部の近況とご挨拶

理学部長 高橋 亮 治

理学部同窓会の皆様におかれましてはますますご活躍のこととお慶び申し上げますとともに、日頃からの理学部へのご支援に感謝いたします。

平成27年度より学長を務めていた大橋裕一前学長に代わり、令和3年度より仁科弘重前理事・副学長が学長に就任されました。理学部関係では宇野英満理事・副学長が引き続き理事・副学長として企画・DX・環境を担当し、堀利栄教授がダイバーシティを担当する副学長として本学の執行部にてご活躍されているところです。私は平野幹前理学部長に代わり令和3年度より理学部長を拝命いたしました。微力ではございますが、本理学部の教育・研究の充実と発展のために専心努力する所存ですので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

理学部は平成31年度（令和元年度）に従来の数学・物理学・化学・生物学・地球科学の5学科体制から理学科の1学科体制に改組を行いました。この1学科による新教育体制では、数学・数理情報、物理学、化学、生物学、地学、の5つの専門分野教育コースに加え、「科学コミュニケーションプログラム」「宇宙・地球・環境 課題挑戦プログラム」といった特別履修プログラムを設置し、理学人としての多様なキャリア形成を目指した人材育成を行っており、令和4年度に改組後の最初の卒業生を社会に送り出すこととなります。また、DX（デジタルトランスフォーメーション）推進の社会情勢を受けて、愛媛大学でも理学部数学・数理情報コースの教員を中心としてデータサイエンスセンターが設置され前理学部長の平野幹教授がセンター長としてご活躍されています。

令和2年の1月に中国の武漢で最初の感染が確認された新型コロナウイルスが、変異を繰り返しながら世界中で猛威を振るい、国内でも令和2年3月以降多くの活動が制限される事態が続いています。大学においても令和2年度中は、授業の多くは遠隔での実施となり、研究活動のための大学施設利用も制限され、サークル活動も対面での実施を認めないという、大学の機能が大きく損なわれる中での教育・研究を強いられ、また学生の皆さんにも多大な不便をおかけすることとなり、同窓会の皆様におかれましても不安な気持ちで見守っていただいていたのではないかと思います。令和3年度より、学長が交代し、大学のコロナ対応の方針も医学的知見に基づく合理的な方向性が示され、少しずつではありますが大学の機能が回復してきています。理学部でも、令和3年度は年間を通して学内施設を利用した研究活動の実施を可能とし、遠隔授業の質の向上を図るとともに対面授業の開講割合を順次増やしてきました。また、本年3月24日には3年ぶりとなる全卒業生が参加する形での卒業式を挙行することができました。

来年度以降も、理学部構成員一丸となってコロナ禍で停滞していた大学機能の向上を今まで以上に進めていく所存です。同窓会の皆様におかれましても、今後とも理学部の発展に変わらぬご支援のほどよろしくお願いいたします。

なお、理学部の最新の教育・研究成果につきましては、ホームページ（<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/>）にて随時公開しておりますので、是非ともご参照ください。（2022年3月）

母校の窓



母校、愛媛大学理学部では2021年度末に生物学教室の井上雅裕先生が定年退職されました。また、

2022年度末に数学教室の土屋卓也先生、物理学教室の宗博人先生、化学教室の佐藤久子先生、生物学教室の中島敏幸先生、データサイエンスセンターの中川祐治先生が定年退職されます。寄稿していただいたメッセージを掲載しています。



昭和・平成・令和の思い出

井 上 雅 裕

この春定年となり、御挨拶の機会を頂いた同窓会会長の仲田秀雄先生と同窓生・教職員の皆様に深くお礼申し上げます。昭和63年3月16日に文部教官助手として採用頂き、33年間皆様と共に理学部での教育研究に携わることができました。これが今一番の喜びです。逆に、未熟な面が多く皆様にも随分ご迷惑をおかけしましたこととお詫びします。今、昭和時代まで遡って振り返りますと様々な事を思い出しました。自分のたわいない話で恐縮ですが少しお伝えいたします。

S63(1988)年は新人の年として最も変化と衝撃の大きな年でした。前任地のUC Davisから帰国の際、Vegetable Crops学部のChairmanであったD.J. Nevins教授とSylvia夫人にご親切に私と荷物を自家用車で運んで頂き、SFO空港で「Lab以外何処にも行けなかったので次は!」と言って送り出して頂きました(後にこれは叶います)。松山空港に着きますと今度は当時の生理学講座教授の村山徹郎先生が迎えに来てくださっていました。お互い初対面で、Davisの友人から貰った麦藁帽子を目印に立っており、と、「君が井上くんかね」と声をかけられ「ハイ」と答えたように記憶しています。これが私にとって新天地松山での第一声・第一歩でした。同研究室には城尾昌範先生と遠山鴻先生が1スパンの相部屋におられ研究や事務手続、下宿探しなど全部お世話になりました。私の部屋兼実験室として生理第3実験室(2スパン)をご用意頂きその全部を占有できるという過分の贅沢を与えて頂き、研究を無事スタートアップできました。流しの横の実験台に電気泳動やHPLC装置を置きアスピレーターも設置、石川優先生が使われていた木製のガラガラ硝子本棚を発生から頂いて植物培養庫に改造、後に約1畳の暗

室も増設しました。窓の内外では水野信彦先生がハトトリックを仕掛けられるまで鳩がいつもポッポと人懐っこく歩き回り、遠くには本部の建物、その向こうに緑深い御幸寺山さんが頭を出してこちらを眺めていました。机の上には野外実習でご尽力頂いた田端英雄先生の強い薦めで赴任旅費全部を出して買ったMac SE(+外付HD)がよく英語を喋っており、横にはImage W.J.がジョージと音を立て往復していました。椅子の後には休憩用の木製ベンチもあり、フルセットで勝手気ままな天国のような生活でした。

当時は講座制で、生物関係では理学部4階に西から形態・生理・生態、5階に発生の講座や学生実習室がありました。今ミューズがある建物に教養部、中島に理学部附属臨海研究所があり、教職員間の交流も盛んでした。生理研究室には常時元気一杯の修士・卒研究生がいて縦横の繋がりや和気藹々とした枠組みの中で楽しく過ごし、隣の生態研から男子学生もよく遊びに来ました。食事の時は一緒に「正美堂さん」に行きました。研究面でも、従来の「植物ホルモンと細胞壁」の研究成果を生物主催の5月の学会で発表させて頂いた後は別テーマ「酵母の重金属耐性」に専念することになり大きな転換期でした。初めて扱う酵母や器具などに戸惑いましたが、研究対象が蛋白質でしたので従来通りの分離精製に重きをおいて進められました。ある夜のこと、ある事情のため培養実験室で一夜を過ごしました。深夜の実験室はガシャガシャとやたらうるさく仮眠もできないまま静かな朝を迎えました。この時、実験材料である生物達の生命力・忍耐力にとっても驚嘆しました。この様に、研究と補助、野外・室内実習などにだけ集中・専念しながら昭和～平成初期の日々を過ごしました。平凡な毎日でしたが、その時の雰囲気と勢

いが原風景や原動力となってこの33年間を支え続けてくれたような気がします。

H 8 年（1996）になりますと、理学部発足（S 43）以来の大改組が待っており、従来の5学科（数物化生地）が3学科に再編され、教養部が廃止、大学院理工学研究科（MR、DR）が新設されます。当時の学部長小松正幸先生（委員長）から広報委員を命じられ「新生・理学部をどうアピールするか」について議論を重ねたことを懐かしく思います。昔から地学が大好きでしたので生物地球圏科学科（生地）の誕生を私が一番喜んだのではないかと自負していました。9年後に3学科時代は終わり5学科になります。コースの壁さえなければ生地は理想の学科だったのではとも今でも思います。

H16年（2004）には国立大学法人法が施行され国立大学法人愛媛大学が始動すると同時に生物学科主任を拝命しました。以後、大学は3回の中期計画・目標期間（計18年）を経て現在に至りました。この時の劇的変化については私見を含め同窓会報で少し紹介しました。特に、H23年（2011.3.11）に東北大震災が起こりその甚大な影響と復旧活動で大学全体も大きな岐路に立たされました。私も55歳の節目を迎え、残り10年間で何が出来るかを強く意識し、国際学会、米国在外研究、エジプト大学間交流事業・海外留学生支援などに注力しました。結果、理学部の社会国際連携事業にも少しは関わることができま

した。令和へと移るH31年度（2019）からの2年間は研究教育評議員・副理学系長として微力ながら理学部運営や社会連携事業に携わらせて頂きました。理学部の社会貢献についても再考する機会を得ましたが、同年12月からのCovid-19拡大で以後2年間殆ど何も出来ない異例の事態でそのまま令和3年度末（2022.3）に定年を迎えました。現在も自粛を余儀なくされる異常な状態が続いています。これらの災禍がいち早く収束し、元来の時空間・人間環境の中で和気藹々としたオフライン・オフマスクでの日常に戻ることを切に願っております。

最後になりますが、私は今でも総合大学そして理学部の素晴らしいところは学部・大学院生、教職員の皆さんが和気藹々として自由に活発に交流や意見を行い、自立的な生活を満喫しながら研究・修学にも専念できるところ、そしてその成果が各自の総合力・体力・底力となって学界だけでなく社会活動、就職・将来設計など多岐に渡って活用・適用されてゆくところだと信じています。卒業生からそのような声を頂くことも多くあり、その度に「だよね」ととても嬉しくなります。卒業生の皆様におかれましては、是非、その理学部の魅力やそこで育まれた強みを活かし、知力と理性・体力・生命力をフルに発揮され、今後益々活躍されますことを願っております。私も日々の鍛錬を怠らず毎日を過ごしていこうと思いますのでどうかよろしくお願いします。



愛媛大学理学部を退職するにあたり

土 屋 卓 也

早いもので、1990年12月に愛媛大学に赴任してから32年以上経ち、私もついに退職する日が来てしまいました。若い頃はピンと来なかったのですが、いざ自分の番が回ってくると、「パワハラ・アカハラ・セクハラ騒動も起こさず、無事に退職できて本当にありがたく、めでたい！」という感じです。心苦しい点があるとすれば、生来の怠け者ですので、特に理学部の事務の皆様には、提出物の遅れ等で多大なご迷惑をおかけしたのではと思っております。どうも申し訳ありませんでした。

まずは、私を愛媛大学に呼んでいただいた愛媛大

学名誉教授の山本哲朗先生に、心からの感謝を申し上げます。山本先生には、いろいろな場面で大変お世話になりました。特に数回の国際会議の開催のお手伝いを通して、国際会議運営のあり方を始め、研究者としての心構えなど多くのことを教えていただきました。九州大学でご指導いただいた藤野精一先生、メリーランド大学でのアドバイザー Ivo Babuška先生と共に、山本先生は私にとっての人生の恩師の一人です。

32年余りの愛媛大学での生活は、総じて楽しいものでした。私の専門は応用数学、特に数値解析学と

いうものです。平たく言うと、「計算機を使っていかに精度良く効率的に方程式を解けるか」を研究する分野です。信州大学理学部の卒業研究では、微分トポロジーを勉強していましたが、抽象的で少し馴染めない感じを持っていました。信州大学を卒業し九州大学大学院に入るときに、「(企業に)就職するのに有利かも」という理由で応用数学を専攻することにしました。なんとなく選んだ分野ですが、偶然にも私の好みと能力にぴったりで、この分野を選んだのは本当に幸運でした。

私の研究分野の対象(の一つ)である数値シミュレーションとは、物理現象を支配する偏微分方程式を数値的に解くことです。その際、どのように微分方程式を計算機に乗るような有限次元の方程式に変換するか(このような操作を“離散化”といいます)を考える必要があります。そのためには、関数解析学を基礎とした偏微分方程式論を勉強し、さらに応用数学的な数値解析学を学び、その上プログラミングを勉強して実際に動くコードを書く必要があります。幅広い予備知識が必要で、最初は大変でした。しかしある程度まで勉強すると、数値解析学が純粋数学の多くの分野と関連していることがわかってきて、俄然面白くなってきました。

数学、特に純粋数学は高度に抽象的です。しかし、数値計算は基本的には加減乗除のみを使って、抽象的な対象物を“具体化・実体化”してくれることがあります。例えば、

$$1 + \frac{1}{4} + \frac{1}{9} + \frac{1}{16} + \dots$$

を計算してみると、200年以上前にオイラーが発見したように値は $\pi^2/6$ に収束していきます。知識としては知っていましたが、実際に自分で計算してみると何か不思議な感じがしました。以前何かの記事を読んでいると、かの大数学者ガウスは、何か新し

い定理を発見すると必ず数値計算でその定理を確認していたと書いてありました。多分ガウスも、同じようなことを味わったのではないのでしょうか。

極小曲面などの偏微分方程式の解や特殊関数の特殊値など、多くの抽象的な対象が数値計算を通して具体化されていく過程や、また逆に数値計算のアルゴリズムの正当性や効率が抽象的な数学できちんと証明されていく過程がとても面白く、大変楽しい研究生活でした。またプログラミング自体もそれなりに面白く、自分に向いていたようです。

とはいえ、30年以上の大学生活はそれなりに山あり谷ありでした。研究が行き詰まることもありましたが、また学科長をやっていた時は、なかなか頭の中が「数学脳」に切り替わらず、論文が書けない時期もありました。しかし、時々(单打ですが)ヒットを打つことができ、特にここ10年ぐらいは若い人たちと共同研究をして、とても楽しかったです。よくいう共同作業で「ケミストリーが起こる」とはこういうことかと思いました。特に、2010年ごろからとても面白い研究テーマに出会い、充実した毎日でした。

数学の研究は、パソコンと文献へのアクセスがあればできるので、退職後もこれまでの研究をこつこつと続けたいと思います。そしてあまり歳を取りすぎないうちに、自分の最近の研究を書籍などにまとめたいと思っています。やはり、多数の論文に散らばって書かれたストーリーを追っていくのは大変なので、多くの人に自分の研究を読んでもらうには、書籍にまとめた方がいいと思うからです。

これからの日本や世界がどうなっていくのか、先行き不透明な状況です。しかし、このような状況でも、皆様のご努力で愛媛大学理学部の発展していくことを期待して、私の挨拶といたします。どうも、ありがとうございました。



理学と工学のせめぎ合い

中 川 祐 治

理系・文系という区分けが明治時代の富国強兵に基づく分類であることを知っている人は少ないと思いますが、ここでは理系の中でも「理学」と「工学」

の違いについてお話ししたいと思います。

私が大学院を出て、最初に就職したのは㈱富士通研究所で、社員には当然工学部出身の方が大勢おら

れ、理学部出身者は一握りでした。入社1年目の新入社員研修で私に課せられたテーマは三次元グラフィックス装置の開発という、当時どのコンピュータメーカーも作っていないものを作るというなかなかハードな仕事でした。メーカーで開発を行うには、研究所以外にハードウェア部門とソフトウェア部門、さらに製品の一貫性を担保する必要があるため、社内規格を担当する部署が加わり、総勢十数名のチームを束ね、ほぼ毎週ミーティングを行っていました。私の役割は、三次元グラフィックスを描画するアルゴリズムの開発とチームをまとめ動かすことです。これは後で分かったことですが、1年後の新入社員研修発表会の席で社長から「これは新入社員研修ではないですね。」と言われ、そのときは何の意味かわかっていませんでしたが、管理職候補試験のレベルだったようです。

さて、話を本題に戻しましょう。チームミーティングは週に1回ありましたが、その間は研究所内のグループで勉強会とアルゴリズム開発の進捗状況報告を積み重ねており、特にアルゴリズム開発では、私の所属しているグループの工学部出身のリーダーと意見を戦わせることが度々でした。リーダーの言っていることは確かに正論で早く結果が出るのですが、『何か違う』という思いがいつもあり、これは一体何なんだろうと悶々としていました。

約4年で㈱富士通研究所を退職し、その後は鹿児

島大学、国際基督教大学、そして愛媛大学へと計3回の退職を経て現在に至っています。これは余談ですが、退職にあたって毎回退職願を書かされましたが、㈱富士通研究所だけは毛筆で書くように指示され、字が下手な私にとっては嫌がらせとしか思えませんでした。

今から5年ほど前に、理学部数学科の学生向けに「お茶会」というなんでも喋れる集会があり、その講演を頼まれた時に理学と工学の違いについて、改めて考え直す機会が与えられました。その時にたどり着いた結論は、問題解決のアプローチの違いであることに気がつきました。つまり、工学系出身者の考え方は試行錯誤をなるべく少なくして短いステップで結論（製品）に到達することで、一方、理学系出身者の考え方は原理追求を経て結論（特許・原理）に到達する、という違いがあるということです。この違いに気がついたとき、かつてのモヤモヤが一気に解決した気分でした。

学部や大学院を出て就職した時に、ほとんどの企業では工学系出身者がマジョリティで、理学系出身者はマイノリティとなりがちですが、そこで挫けてしまうのではなく、時間がかかっても原理追求を諦めず、社会（企業）にとって本質的に重要となる原理を見つけていく努力を重ねていくのが理学系出身者の使命だと思います。卒業生みなさんのご活躍を期待しています。



16年前の赴任を振り返って

宗 博 人

ひよんな事から四国（愛媛大）に赴任したのは、単なるうっかりであった。以下は事実で今でも嫁さんに揶揄されるが人に話してもネタとしか思ってもらえない。何がひよんな事かというと、僕の前任地（新潟）と嫁さんの勤務地（川崎）が遠いので、お互いに「もっと近い所に移れるといいね」と言っていた。新潟から川崎は、新幹線+電車で3時間くらい。

ところで、四国からは羽田便がある飛行機だと飛行機+電車で2時間半くらいなので、「近いじゃん。」という事で、愛媛大の公募にアプライした。

これが嘘のような本当の事で、赴任当初は地理的

にも実際の時間も（飛行機は乗るのにも降りるのにも余計な時間がかかる）遠い事が分かって嫁さんからチクチク皮肉を言われていた。

しかし、遠い事は悪い事ばかりではない。時間の流れが今までと違って研究にも教育にもじっくり向き合うようになった。特に研究面では、週末に近くの喫茶店で何時間も居座って考えたり、一心不乱に計算したりした結果、今まで思ってもみなかったアイデアが浮かんできた事が度々あった。都会で何時間も喫茶店にいと「注文するか退店」を促される。そうすると折角浮かびかけたアイデアが消えてしま

う。結論的に言うと、自分の研究スタイルにはこの松山の環境は適していたと今では思っている。

また、嫁さんもよく「夏の暑い時期が長いのを除けば松山は季候がいいよね。」と言っている。確かに夏はエアコンの部屋にいないと頭が溶けそうでそれが10月まで続くのは閉口であるが、それ以外は確かに雨が少なく近くをドライブするのもいい。それに冬の時期は、毎日どんよりの雲が垂れ下がって強風が吹きまくる前任地よりも遙かにいい。

人間関係についても述べたい。人というものは流行の言葉で「多様性」を持っているので、いろんな人がいるものである。愛媛大の学生さんも教職員の方も。従ってすべてが良かったなどというが無責任でかつ自分が毫碌しているような気がするので、そうは言いたくはない。いろんな経験が自分の刺激になった事だけは事実なので、それは言うておく。

それよりも松山の人で驚きだったのが、「優しい」ことである。自分が借りている駐車場の場所を一度だけ間違えた事があって、自分の車を隣の別の利用者（毎日車を使っている）の駐車場に止めて、それが何週間も気づかずに続いていた事があった。その隣の人は、逆の隣の場所（そこは契約者がいない）に車を止めて、僕とすれ違っても文句の一つも言わないのである。一月くらい過ぎてやっと自分が場所を間違えた事に気づいて、元の場所に移動し、たまたまその人に会った時に謝ったら、「はあ」という簡単な返事で驚いた事がある。僕だったら苦情の一つも言いたくなる。

その後その人は元の場所に車を移動して、元の鞘

に収まったのだけど、何か居心地が悪いまま過ごした。また自転車の鍵をかけ忘れても自転車を盗まれた事はないし、これって、松山の人の性格なのでしょうかね。まあ確かに16年も住んでいると色んな事があるもんですね。でも、今度定年退職する事になって良かったと思う事の一つに、段々、自分のオフィスの乱雑さがひどくなっているの、これ以上この部屋にいと窒息しそうだし、離れる時にきれいにするのも大変そうだと懸念していたタイミングでの退職なので結果オーライである。折角なので、感想だけではなく学問(物理学)についても一言述べたい。

先日ネットで「科学は人を幸せにするか」という感じの討論番組があった。それを見ながら奇妙な感じを抱いた。他の学問はよく分からないので、以下対象は物理学に限らせていただく。技術は人を幸せ（もしくは不幸）にする可能性はあるし、その基本知識は科学に基づいているのも確かである。

僕は学問（物理学）はそれに関する人の活動も指すのは尤もだが、その結果である自然の法則を指すと思っていた。つまり、学問（物理学）は自然そのものなので、人類の幸福や不幸とは別の次元の存在のように思えるのである。なので、ネットでの討論番組を違和感を持って見ていた。まあえてして「科学」と「技術」を混同して使いがちなので、そんなに目くじらを立てる必要はないのかもしれない。

最後に言いたいことは、「物理とは」や「科学とは何か」をじっくり考えさせられた「時間」をここ松山で愛媛大で与えられたことは幸せな16年間だったと思う。



退職を迎えるにあたって

佐藤 久子

人生はよく大海原を航海する船に例えられます。私のこれまでの航海は、次から次へと荒波に遭遇するかなりダイナミックなものだったと思います。見方によっては、いつ海に投げ出されるかもわからないぎりぎりの綱渡り航海でした。2002年45歳で会社を退職してポスドク研究員となりました。先の見通しもなく毎年身分と研究場所の確保に明け暮れていたころ、2009年に愛媛大学理学部化学科（大学院理

工学研究科）の准教授に採用されました。最初の挨拶では、生まれ故郷（現在の協働センター南予が私の小学校）に近いことも述べさせていただきました。前任の東長雄教授がネーミングされた複合体化学研究室の名前をそのまま引き継ぎました。自分の研究室と自分の名前のはいった郵便箱を持てた喜びを本当に噛みしめました。翌年2010年には教授に昇進させていただき、一層の責任を感じて身の引き締まる

思いでした。そして今は、なんとか定年退職が近づいて来たという感慨が迫って来ます。

愛媛大学に赴任してからの研究の中心テーマは、右手左手の関係のような分子不斉（キラリティ）に関係するものです。ゲル、分子結晶、多核金属錯体にみられるような多数の分子が連結することによって現れる不斉構造（“超分子キラリティ”と呼んでいます）に着目し、その解明のためのキラル分光法の研究を行ってきました。中でも赤外領域のキラリティを調べる赤外円二色性分光法に着目しています。この装置をさらに生体試料をそのまま測定できる装置にしたいと外部資金に申請しては不採択を繰り返してきました。やっと定年近くに採択された外部資金で世界に例のない唯一の装置を完成させることができました。正に“描いていた夢”が実現したということでしょうか。多くの共同研究者のおかげで装置が完成し、成果を発表することができ、最後に研究活動で学長賞をいただくことができました。

研究室を閉めるにあたって、1年くらい前から一つ一つの装置にお別れをしているところです。苦勞を共にしてきたある意味自分の分身のような装置たちにはどの装置にも私の想いが詰まっています。私の気持ちそのままに装置も調子がよかったり、エネルギーが下がったりします。その時々のことを思い出しながら、事務の方々に助けていただき片づけています。メーカーさんからは、私が特注設計した装置が最近になって、ニーズがでてきたと聞いてとてもうれしく思いました。その後外部資金に採択されるたびに少しずつバージョンアップを続けてきましたので、愛着もひとしおです。「あれからもう10年とは早いものだ」とメーカーさんもなんだか感慨深げでした。

福島第1原発の事故に関しては粘土科学の側面からなんとかしなければとの思いでやってきました。共同研究者の方々と福島の地でミニプラントを立て、土壌からのセシウム除去の実証実験を行ったことも忘れることができません。私にとって初めてのフィールドワークで、これまで味わったことのない経験をさせていただけましたが、まだまだ難しい問題が山積みです。

つらい時期に実験をしていると、新しい現象を自らの手でみつけることができたことなどもありました。今振り返ってみますと、そんな時期は学外の共同研究者や化学教室を始め愛媛大学内の共同研究者のおかげで乗り越えることができたと思っています。

す。愛媛まで多くの研究者やその研究室の学生さん達が来てくださり、研究という形で私を支えていただきました。おかげ様でひとつひとつの思い出を論文という形にして、世の中にだすことができました。複合体化学研究室を立ち上げてから少ない人数ですが、学生さんを指導できて、実社会に送り出すことができましたことは私にとっての財産です。たった一人の博士号をもつ学生さんを育成でき、彼をアカデミックポストにつけることができましたことも私の大きな喜びです。彼が、私の研究を引きつぎ発展してくれることを願っています。

現在もコロナによる研究活動の制限など想像を超えることばかりが続いています。量子化学の授業担当が遠隔授業から始まり、教えることの難しさは赴任以来、未だ尽きることのない私の悩みの種です。管理運営面では広報委員長、社会連携委員長、キャリア委員、研究コーディネーター、女性未来育成センター委員、日本化学会の委員などで種々の行事の事務などやらせていただきました。最後の2年間コース長を拝命していますが、至らぬことばかりで、私を支えてくださっている化学教室の先生方々や事務の方々に本当に感謝しております。社会連携に関連しては愛媛県庁の環境政策などの委員や委員長、科学技術振興機構のプログラムオフィサー、環境省環境研究推進委員会委員、日本学術振興会の科研費委員などをさせていただきました。

最後にぜひとも理学同窓会の皆様にお伝えしたいことを記します。本年度大学院組織が改組されました。社会人修士課程や博士課程に興味のある方がおられましたら、ぜひとも愛媛大学でキャリアアップの路を目指しませんか？ 私の時代には社会人のための大学院はまだありませんでした。そのような中で企業で働きながら、35歳で博士号を取得することができました。今は制度も整ってきております。ぜひともこの制度を活用してキャリアアップにつなげてほしいと思います。この苦しい時代だからこそ、今まさにそのチャンスではないでしょうか？

私自身は信じられないことに、定年を前にして、初めての分野の新しいテーマで科研費に採択されました。新しいことを楽しみながらチャレンジできることに喜びを感じます。理学部の皆様にはまだご迷惑をおかけするとは思いますが、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

最後に理学同窓会がますます発展されることを願っております。



にきたつの道と理学部での思い出

中 島 敏 幸

2023年3月に退職の日を迎えることになります。私が愛媛大学理学部に赴任したのが1999年4月ですから、およそ24年が経ちました。この間いろいろなことがありました。研究では好きなことを自由にやらせてもらい、教育では学んでいるのは実は自分であることを気づかされる日々でした。

私の研究分野は生物学ですが、あえて分けると二つあります。一つは、生物進化の仕組みを実験と理論の双方から明らかにすることです。多くの進化の研究では既に進化した現生の生物を調べて行うのが主流ですが、世代時間の短い生物を実験室で進化させてその過程や仕組みを調べる手法（実験進化）があります。私の場合は、微生物を用いたモデル生態系を作り、生態系の中で構成種がどう進化するかを解析していきました。世代時間の短い微生物といえども長い時間がかかります。13年間の長期培養と分離した多くの変異株の性質やDNAをコツコツ調べていき、退職の日ギリギリまで解析は続きましたが、どうにかまとめられる段階にこぎつけました。この研究では「生態系という全体が構成種の環境を作り変化させ、それらの進化を誘導していく。それにより生態系の物質とエネルギーの流れの構造が変化して生態系自体も進化する」という結論にたどり着きました。もちろんメンバーである個々の生物側の進化的アクションがあつての進化ですが、全体が部分を“そうさせる”という側面を実証的に浮き彫りにできたと考えています。自然現象には境界がなく研究は容易に自分の専門領域を超えましたが、生物学科の同僚との共同研究など研究室間の垣根が低い理学部の文化のおかげで進めることができました。また、講義や研究指導の中でも自分がよく理解できていないことや新しい問題に気づくことがよくありました。研究と教育は同じコインの裏表かもしれません。

ところで、ここ3年間は新型コロナウイルスによって、大学も社会生活も随分悪影響を受けました。新型コロナのパンデミック真っ只中の頃は、私が担当する「進化生物学」の講義では、コロナウイルスの派生株の系統樹を紹介して進化過程の説明に用い

たり、共生の進化を教える箇所では毒性の強い病原ウイルスは適応進化の結果として弱毒化する仕組みや事例を紹介し、新型コロナは良い教材にもなりました。もっとも、弱毒化の兆しがまだ見えない頃の試験の答案には「講義で言っていたような弱毒化はまだないようだが…」などと疑っている学生もいました。このパンデミックもようやくワクチンや感染による免疫保有人口が増え、予想した通りウイルスの弱毒化も見られ、出口はもうすぐのようです。このパンデミックはあらためて人間同士の対面での付き合いの重要性を教えてくれましたが、同時にオンライン会議という道具を普及させた正の遺産も残したと思います。

私の二つ目の研究分野は「生命とは何か」というかなり基礎的な分野です。私は生命系における事象の確率や情報の理論の切り口から研究をしてきましたが、同時に生物哲学の観点も好きで、この両面から取り組んできました。若い頃はこの研究を“こっそり”やっていたのですが、ありがたいことに愛媛大学では堂々と取り組むことができました。着任時に辞令を下された当時理学部長の小松正幸先生（後に本学学長）は、ぜひ理学部でそのような研究や考え方を継続して広めてくださいと仰ってくれました。「何ていいところに来たのだろう」とその時感激したことを今でも鮮明に覚えています。

京都の哲学の道は有名ですが、私の哲学の道は理学部の裏門を出て道後温泉につながる水路沿いの“にきたつの道”です。集中できないときや考えに行き詰まったときに、水の流れを見ながら何度もこの道を歩きました。大学に赴任した当時は水路にはナマズを何匹か見かけたのですが今はもう居りません。水路を覗きながらこの道を歩き、道後商店街にあった喫茶店（今はなき“なも”）に向かうのです。コーヒーを飲みながら1時間ほど考え、ある程度の壁は突破できたような気分になったところで、また同じ道を戻ります。いずれの研究テーマにおいてもこの道を歩きながらいろいろなことを考えました。

この原稿を書きながら愛媛大学での出来事を振り返ると、思うようにいかなかったことや意外とうま

くいったことが織り交ぜられて思い出されます。人生は選択の連続といいますが、自分が世界の次の状態を選択できるわけではありません。自分の選択と物質を含む自分以外のあらゆるもの達の選択により世界の次の状態が決まり、未来がつくられるのでしょう。だから、ままならないことも多いわけです。アドラーの心理学でしょうか、私が好きな捉え方が

あります。過去の実実は変えられないがその解釈は変えられる、そしてその新しい解釈で未来は変えられる、というものです。在籍中には学生、職員、教員など様々な方に助けられてきました。この場を借りてお礼を申し上げるとともに、皆様がより良き未来を築かれることを願っております。

教室だより

【数学教室】

皆様におかれましては、ますますご活躍のこととお喜び申し上げます。学生支援をはじめ、日頃よりご支援を賜り誠にありがとうございます。前号(2021年2月発行)以降、この2年間における数学教室の近況をご報告いたします。

教員人事では、令和3年3月に平出耕一先生が定年退職され、令和4年3月に加藤本子先生が琉球大学へ転出されました。また、令和4年2月に岡山大学から寺本有花先生が助教として着任されました。令和4年3月に高知大学から愛媛大学データサイエンスセンター教授として着任された本田理恵先生と、令和4年4月に准教授へ昇任されたデータサイエンスセンターの石川勲先生が数学教室に加わり、現在16名の教員が数学・数理情報コースの教育・研究指導を担当しています。なお、令和5年3月には土屋卓也先生とデータサイエンスセンターの中川祐治先生が定年退職される予定です。数学教室の詳細については、以下の公式サイトでご覧いただけます。

<http://www.math.sci.ehime-u.ac.jp/index.html>

学生の就職状況に関しましては、令和3年度数学科卒業生のうち14名が大学院に進学し、10名が教員・公務員として、28名が民間企業に就職しました。民間企業に就職した卒業生の半数は情報通信に関わる職に就きました。令和4年度卒業予定者の進路状況についても、おおむね順調とのことでした。

新型コロナウイルスの感染拡大を受け令和3年度前期までは遠隔授業が中心となっていましたが、令和3年度後期には可能な限り、令和4年度には原則として対面授業を実施することとなりました。感染

防止対策を徹底してではありますが、学生の（マスク越しの）顔を見ながら授業を行えるようになりました。休み時間の談笑や、セミナー室からの議論の声が聞こえると、大学の日常が戻ってきたことを実感します。

令和5年4月に大学院理工学研究科が改組されます。従来の数理科学コースは数理情報プログラムに再編され、数理科学コース担当教員と工学系情報工学コース担当教員が当プログラムの教育を担当します。当プログラムでは、数学の諸分野の高度な理論から応用数学・数理情報・コンピュータ科学に至るまで、学生の興味に応じて幅広くバランスよく学べるカリキュラムが設計されています。平成31年4月に入学した理学部理学科数学・数理情報コースの1期生が当プログラムに入学する予定です。学部・大学院を通じた教育によって、数学・数理情報の能力を身につけ、社会の期待に応えられる学生を送り出していきたいと考えています。今後ともご支援を賜れましたら幸いに存じます。

末筆ながら皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。
(山内 記)

【物理学教室】

同窓会の皆様には各分野でご活躍のことと存じます。物理学コースの近況についてご報告いたします。理学部で新カリキュラムが導入されて、早4年経過し、新カリキュラムでの卒業研究生が在籍するようになりました。学生により良い教育を提供するための新カリキュラムです。来春旅立つ一期生にはこれまでも増して活躍してくれることを期待しています。さて、現時点での物理学分野の構成員ですが、理論物理学分野として宗博人（素粒子論）、瀨崎員弘（非平衡統計基礎論）、中村正明（物性理論・統

計基礎論)、飯塚剛(非線形物理学)、宮田竜彦(統計力学・溶液論)、実験物理学分野として前原常弘(プラズマ理工学)、小西健介(磁性・低温物理学)、近藤久雄(光物性物理学)、天文学分野として栗木久光・寺島雄一・志達めぐみ(X線天文学)、長尾透・鍛冶澤賢・松岡良樹(光赤外線天文学)、清水徹(太陽系プラズマ物理学)、近藤光志(超高層物理学)が在籍し、教育研究活動を行っております。活動内容は理学部で正式採用しております、researchmap(<https://researchmap.jp/researchers>)からいただければお分かりになれるかと思います。幅広い分野で多くの研究成果を公表できております。ただ、残念なことに、2022年度末をもって宗博人が定年退職の予定です。教育・研究、ならびにコースの管理・運営で尽力していたので、コースとしては大きな損失となります。

2022年も新型コロナが猛威をふるい、11月中頃には第7波のピークがあり、国内で過去最多の感染者数を記録しました。新型コロナの感染者が開始した2年前は、在宅勤務など活動に大きな制約がありましたが、今は感染防止対策等のコロナの知識が蓄積され、教育研究活動もコロナ前に戻りつつあります。この間、学生への教育面で遠隔の便利さを実感できましたが、改めて対面のありがたさもわかった気がします。また、2月からのロシアによるウクライナ侵攻や円安の影響で、国内での物価が上昇しています。エネルギー価格の上昇は、電気代高騰という形で大学での教育研究活動も圧迫しています。一刻も早くに戦争が終結し、再び安定した環境が訪れるように切に願っています。

こうした状況下、卒業生の皆様におかれましても、一層のご支援・ご協力を賜れば幸いです。末筆ながら、皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

(栗木 記)

【化学教室】

2019年度の理学部改組により、化学科は理学科化学コースとなりました。2022年度より新カリキュラムの学生が研究室に配属されて研究を開始したところです。2020年から新型コロナウイルスの影響を受けて、苦しい状況が続いてきました。研究や教育への制限は大学本来の姿が変わってしまった時期でした。2021年2月は修士論文審査会を感染対策をして行いました。卒業論文発表会は人数を制限した対面

と遠隔のハイブリッド化で田上瑠美助教と愛化会のご尽力で行いました。2022年度になって、やっとコロナ対策をしながら、実験以外の科目でも対面での授業が開始されたところです。遠隔授業の続いたこの2年間、今の4回生、3回生への影響は計り知れずあります。4回生にとって研究生活で挽回できることを願っているところです。

2022年度になってやっと海外の学会での発表も許可されるようになってきました。多くの先生方が海外出張されています。国内での学会も対面で開催されるようになり、研究活動の上では対面での議論の大切さを感じているところです。学生、教員の両方にとってまだ困難な状況が続く中、このように皆の努力と協力、周囲のご理解のもとで、教育研究に取り組んでいます。

構成員としては2021年3月をもって、長岡伸一教授が定年退職を迎えられました。2022年4月から田上助教(特定教員)が助教に昇進されました。2023年3月をもって佐藤久子教授が定年退職を迎えます。宇野英満教授は引き続き理事として大学の運営に当たられます。2022年度現在の研究室と教員の構成は次の通りです。①固体物性化学・反応化学系:〔固体物理化学〕内藤俊雄・山本貴、〔構造化学〕小原敬士・垣内拓大、〔無機化学〕高橋亮治・佐藤文哉、〔複合体化学〕佐藤久子、②分析化学・生物化学系:〔分析化学〕座古保・島崎洋次、〔生物化学(プロテオサイエンスセンター)〕杉浦美羽・小川敦司、〔環境化学(沿岸環境科学研究センター)〕国末達也・野見山桂・田上瑠美、③有機合成・物質科学系:〔有機化学〕宇野英満(理事)・奥島鉄雄・高瀬雅祥、〔有機化学(学術支援センター)〕谷弘幸・倉本誠・森重樹。以上、20名の教員で、理学部化学コース・大学院理工学研究科分子科学コースの教育研究を行っています。

厳しい社会状況ではございますが、引き続き卒業生・同窓会の皆様からのご助言・ご支援をお願いいたします。

(佐藤 久子 記)

【生物学教室】

皆様におかれましては、ご健勝のことと存じます。生物学コースの近況についてご報告致します。新型コロナウイルスは、様々な行事に今もなお大きな影響を及ぼしておりますが、修士論文審査会、卒業論文発表会は予定通りに実施することができました。

人事に関しましては、公募により選ばれた加藤大貴助教が令和3年3月より新たに赴任されました。加藤先生は植物学を専門としており、コケ植物の進化を研究されております。一方で、井上雅裕教授が令和3年3月に定年退職を迎えられました。長らく生物学教室での教育と研究に貢献されてきた井上先生に心より感謝致します。

改組により生物学科は生物学コースに変わっておりますが、生物学教室ではこれまでどおり、「形態形成」、「生理・適応」、そして「生態・環境」の三つの分野を柱として教育と研究を推進しております。形態形成領域では佐藤康（植物形態学）、金田剛史（植物形態学）、高田裕美（発生生物学）、村上安則（進化形態学）、および福井眞生子（進化形態学）の5名、生理・適応領域では佐久間洋（植物生理学）、加藤大貴（植物生理学）、北村真一（魚類感染症学）および仲山慶（環境生態応答学）の4名、生態・環境領域では中島敏幸（生態学）、井上幹生（生態学）、畑啓生（生態学）、今田弓女（生態学）および岩田久人（環境毒性学）の5名が、それぞれの研究室を運営しております。令和4年度においては卒業研究生45名、博士前期課程の大学院生27名、博士後期課程の大学院生3名が各研究室に所属して研究に励んでおり、優れた研究成果を挙げております。

先述の通り、現在も新型コロナウイルスの影響が色濃く残る状況が続いております。しかし、令和4年度には授業の多くが対面形式となり、かつての授業風景が再び見られるようになってきました。コロナ禍で様々な活動に制限がかけられ、沈みがちだった学生の表情にも明るさが戻ってきたように思います。新型コロナウイルスへの対応の過程で、教員の創意工夫により、多くの授業でオンライン教材が整備されたことは、厳しい状況が生物学コースの教育環境を進化させたと言えるかもしれません。今後も在学生の皆さんができる限り充実した学生生活を送ることができるように最善を尽くす所存です。卒業生の皆様からのご助言やご協力を頂けると大変ありがたく存じます。最後になりますが、卒業生の皆様のご健康を心よりお祈り申し上げます。

（村上 記）

【地学（地球科学）教室】

理学部同窓会の皆様におかれましては、各分野でそれぞれにご活躍のことと存じます。地学（地球科

学）教室の理学部同窓会前号（12号：令和3年2月発行）以降の近況を報告いたします。

人事では、令和3年2月に、固体地球科学がご専門の井上紗綾子先生が地球深部ダイナミクスセンター（GRC）の助教として着任されました。令和3年3月には、比較惑星学がご専門の桑原秀治先生がGRCの助教として着任されました。また同月に、GRCの西真之先生が大阪大学へ転出されました。令和3年3月末日をもって、Alexandra Abrajevitch講師が退職されてロシアへ帰国され、GRCの大藤弘明教授（東北大学）のクロスアポイントメントが終了しました。令和3年4月に、鉱物学がご専門の延寿里美先生が助教として着任されました。また同月より、掘利栄教授が副学長（ダイバーシティ担当）に任命されました。

現在、地学教室では、学部専任教員7名（地質学・鉱物学分野）、GRC所属の教員11名（固体地球物理学分野）、沿岸環境科学研究センター（CMES）所属の教員4名（海洋学分野）で、研究と教育をおこなっています。平成28年度に社会共創学部へ転出された榊原正幸教授は、大学院では引き続き地学教室での教育をおこなっておられます。学部専任教員が7名で他のコースの半数程度であり、管理運営や野外実習の指導における教員の負担が他コース以上に大変な状況は相変わらずです。

教育面では、コロナ禍がある程度収束して、日常を取り戻しつつあります。その中で、コロナ禍で発展した遠隔での会議や授業などの良い点のある程度引き継ぎつつ、原則として対面授業がおこなわれています。令和5年3月に、理学部改組（令和元年度）後に入学した学生が初めて卒業を迎え、社会へと送り出される予定です。また、令和5年4月には、大学院の改組が予定されています。現在、大学院理工学研究科は5専攻で、大きく理学系と工学系に分かれています。改組後は1専攻（理工学専攻）になります。博士前期課程は、専攻の中に4つの基盤プログラムがあり、その中に既存のコース（分野）が入る形になります。地球進化学分野は、物理・化学・生物とともに、自然科学基盤プログラムの中に入ります。名称も、「地球進化学」から「地球科学」に変更されます。博士後期課程は、基盤プログラムはなく、理工学専攻の下に地球科学分野が設置されます。

学部・大学院ともに大括りでの教育体制となりましたので、これまで以上に多様な学生の教育をして

いくことになると予想されます。地学教室の同窓生の皆様には、今後ともご支援とご協力を頂けたら幸

いに存じます。最後に、同窓生の皆様の益々のご活躍とご健康を心より祈念いたします。（鏑本 記）

東京支部だより



東京支部活動報告

理学同窓会東京支部長 石川 貴之

愛媛大学理学同窓会会員の皆様には日頃より支部活動の運営にご支援・ご協力をいただき、誠に有難うございます。新型コロナウイルス感染症の拡大状況を鑑みこの2年間（令和2年度、令和3年度）の総会および懇親会を中止し、本格的な活動が出来ておらず、残念に思っております。本年度からはコロナ感染症対策に留意しながら、徐々にではありますが、支部活動も再開させていただきたいと考えております。

『令和4年度愛媛大学理学同窓会東京支部「総会」』 書面開催のお知らせ

本年度より東京支部長を佐伯雅弘さん（理・数学・13回）より会計幹事、総務幹事で長らくお世話になっておりました私、石川に交代させていただきました。令和4年度役員交代のご報告、令和元年度決算、令

和4年度予算案・決算案、令和5年度に向けての活動計画、令和5年度予算案について令和5年3月を目途に書面にてご報告、ご承認をいただき、コロナ禍の活動について総括をさせていただき、次年度からの活動をスタートさせていただきたいと考えております。メール、郵送での皆様へのご連絡を準備しておりますので、何卒、よろしくお願い申し上げます。

本年度も懇親会を開催することは出来ませんが、来年度以降はZoomの活用、校友会首都圏支部において他学部同窓会などと協議されている他学部同窓会支部との講演会、懇親会などの合同開催など、新しい方式での会員相互の親睦関係を大学の変化と共に未来へ発展させていきたいと思っています。今後ともご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。





いつまで続く憂いの日々

理学同窓会関西支部長 堀内 眞 理

皆様、ご無沙汰致しておりますが、いかがお過ごしでしょうか。

前回、関西支部の総会のご案内状を発送したのは2020年2月17日でした。

総会準備に追われている時は、案内状投函からわずか2週間たらずで、支部総会・懇親会中止の葉書を投函することになるとは思ってもいませんでした。

今から当時を振り返りますと、中国武漢で確認された新型コロナウイルスがアジア諸国へ広がる気配が出て、関連の報道が、騒がしくなり始めたころでした。コロナの国内侵入が明らかとなり、1月末に日本政府が感染症法上の「指定感染症」に指定するなど、国内医療機関への緊張感を高める動きがあり、都市部での感染拡大の問題が身近に迫ってきました。

会場として予約しておりました「大阪倶楽部」は大阪市の中心部。お集まりいただく際にご利用頂く交通機関の人混みの危険性をも考えたとき、中止は

やむをえないと判断しました。

これを書いている22年11月の時点では、コロナ騒動は依然として収束とはほど遠く、第8波の報道、予防接種も5回目の案内が届くという状態です。「一堂に会して、同じ空気を吸いながら、旧交を温める」という懇親会のたいせつな目的の一つを、かつてのように安心して楽しめる兆しすら窺える状況にはありません。

同窓会誌13号が発行される頃は、前回の総会中止から丸3年経ったことになります。

何もできないまま過ぎた3年、先の見通しがたかない現状に虚しさだけが募ります。

関西支部便りでご報告できることが全くないことが、残念でなりません。

明るい話題の共有できる日が早く訪れることを願いつつ、皆様のご健勝を心からお祈り致します。

会員の広場



鳥類の調査・保護活動

理学部物理学科1回 1972年（昭和47年）卒業 岩 本 孝

高等学校の理科教諭を定年退職した後は専門分野から離れ、鳥類調査をライフワークとして活動してきました。現在は主として重信川河口で鳥類調査を行っています。日本野鳥の会愛媛のメンバーとともに、1996年6月から調査をスタートし、毎月1回（1、4、9月は2回）のペースで実施しています。調査

方法は、設定した調査範囲をいくつかの担当区域に分割し、一斉に全種類をカウントします。鳥はじっとしていないので、カウントするのは容易ではありません。これまで通算で175種、年間で100～80種類程度を記録していますが、年々種類数、個体数ともに減少しています。1997年4月14日には諫早湾の干



重信川河口

拓のために潮受け堤防の水門が締め切られたことが大きなニュースになり、干潟の重要性がクローズアップされました。それをきっかけに干潟に渡来するシギ・チドリ類が注目されるようになり、1999年に環境省主催のシギ・チドリ類個体数変動モニタリング調査が始まりました。2004年からはモニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査に移行し現在に至っています。日本全国で重信川河口を含む100サイト以上が参加し、春、秋、冬の3シーズンのデータを環境省に提供しています。シギ・チドリ類（下図のハウロクシギは大型のシギで絶滅危惧Ⅱ類〈環境省〉、準絶滅危惧〈愛媛県〉に指定されている）は、主に干潟などの湿地でカニやゴカイなどの底生動物、泥表面の微生物を餌としています。シギ・チドリ類の多くは、シベリア周辺で繁殖し、オーストラリア周辺で越冬する渡り鳥（旅鳥）です。日本へはその渡り途中に立ち寄り、干潟などの湿地でエネルギーを補給しています。近年、中継地の日本だけでなく、繁殖地や越冬地においても環境が悪化し、シギ・チドリ類の数は減少を続けています。私たちはシギ・チドリ類だけでなく、全種類を調べることでより鳥類各種の増減に気を配りながら、重信川河口の環境を鳥類の視点から見たいと思っています。



また、個体数の減少が著しいシロチドリ（絶滅危惧Ⅱ類〈環境省、愛媛県〉）の繁殖を保護するため、2年前から愛媛県の許可を得て繁殖期の間重信川河口の砂浜に保護柵を設置しています。これは潮干狩りや釣りなどのために砂浜を通過する人が多く、卵が踏みつけられる被害が多かったためです。しかし、何者かに（カラスと思われるが、正体はつかめていない）卵やヒナが捕食され、繁殖率は極めて低い状況です。

さらに、愛媛県や松山市のレッドデータブック作成、改訂の際には鳥類調査にも参加し、貴重な経験をさせていただきました。中でも瀬戸内海の無人島調査で、カラスバト（国の天然記念物）の生息や県内で初めてウチヤマセンニュウの繁殖が確認されたことが印象に残っています。

最近では体力がだんだん衰え、ハードな調査はできなくなってきましたが、重信川河口鳥類調査を中心に、シロチドリの繁殖保護活動やタカの渡り調査など、鳥類の調査・保護活動を楽しみながら続けていきたいと思っています。



シロチドリの♂



抱卵中の♀

総会報告



3年にも及ぶコロナ禍にあって、ワクチン接種も進み、「Withコロナ」という新しい社会へ移行しつつありますが、だからこそ感染リスクを回避する行動が必要とされています。そんなコロナ禍の状況ですので、2022年度総会は前回と同様、対面での開催を中止し、「紙面での総会」として今会報13号内で各種ご報告をいたします。会計報告、事務局だよりをご覧ください。

なお、総会における承認は書面で行うことといたします。ご意見ご要望がありましたら、同封のはがきまたはメールにてお寄せください。

理学同窓会役員

〈顧問〉

高橋 亮治《理学部長》

河野 太志《理学部事務課長》

〈会長〉

仲田 秀雄《文理：物理 20回》

〈副会長〉

大谷 勲《理学：数学 5回》

千葉 昇《理学：地球 1回》

〈幹事〉

岩本 孝《理学：物理 1回》

永井 博《理学：化学 2回》

谷 弘幸《理学：化学 12回》

森本 千恵《理学：化学 13回》

小笠原恵子《理学：地球 5回》

高田 裕美《理学：生物 16回》

鎌田 浩子《理学：化学 19回》

辻田 隆広《理学：化学 21回》

池上 亨《理学：化学 23回》

垣内 拓大《理学：化学 33回》

〈監査〉

二宮 啓二《理学：化学 14回》

佐々木靖夫《理学：生物 8回》

各種事業の紹介と報告



理学同窓会事業の紹介と報告

1. 主幹事業

○会報発行

第5号以降隔年で発行し、本号で13号を迎えた。

○ホームページの作成及び管理

2020年4月、2021年12月、2022年2月、4月、9月に更新を行い、12月にはリニューアルを行った。

○会員名簿の管理

随時行っている。

○就職支援

2. 主催事業

○教員採用者に対する奨励金支給

2020年度11名、2021年度1名に支援した。

○理学部新入生および卒業生への記念品贈呈

2020年度、2021年度新入生各250名へ理学同窓会名入り印鑑ケースを贈り、2020年度、2021年度卒業生各270名へ名入りエコバッグを配付した。

3. 共催事業

○同窓会員が行う事業に対する援助

①支部及び支部活動参加者への援助

- ・東京及び関西支部への支部総会・懇親会を

開催する資金の補助

- 支部総会・懇親会出席者への参加費補助
- その他、支部が特別に行う記念事業等の資金援助
- ②理学部の学科や講座に常設される同窓会への補助（会則を有し代表者が存在し恒常的に会合が開催されることが補助の条件）
 - 同窓会起ち上げ資金の補助（起ち上げ時のみ補助）
 - 同窓会会合出席者への参加費の補助
- ③常設でないクラス会や同期会への補助
 - 会合への参加費の補助
- ④理学部と共催により行う事業の遂行
 - 記念行事等の開催
 - 理学部教員による理学同窓会員に対する科学技術相談の仲介

4. 後援事業

- 理学部が行う学生の表彰への副賞贈呈
 - ①理学部奨励賞（1年次成績優秀者を表彰する際）の副賞贈呈
2020年度22名、2021年度21名の成績優秀者へ理学部奨励賞副賞として図書券を贈呈した。
 - ②優秀な修士論文に対する表彰がなされる際の副賞贈呈（諸般の事情により修士論文賞受賞者の選考ができず未実行）
- 理学部が行う卒業生の協力を必要とする授業の開講に対する支援
 - ①学生の多能的能力涵養授業への支援（現在までは大学から必要資金を調達できるため未実行）
- 愛媛大学留学プログラムによる学生の海外研修に対する協力金拠出
 - ①理学部が立案する留学プログラムに参加する理学部学生の海外研修に必要な資金の一部を拠出

会計報告



2020年度（2020.4～2021.3）

収 入		支 出	
2019年度より繰り越し 会費（243人） 利子	¥20,010,064 ¥4,860,000 ¥1,499	通名簿管理費 支部等補助費 運営費 会報発行 学生支援費 2021年度へ繰り越し	¥47,423 ¥104,500 ¥0 ¥303,095 ¥1,138,145 ¥545,830 ¥22,732,570
収 入 計	¥24,871,563	支 出 計	¥24,871,563

2021年度（2021.4～2022.3）

収 入		支 出	
2020年度より繰り越し 会費（222人） 利子	¥22,732,570 ¥4,460,000 ¥998	通名簿管理費 支部等補助費 運営費 学生支援費 2022年度へ繰り越し	¥49,091 ¥361,900 ¥0 ¥358,055 ¥360,940 ¥26,063,582
収 入 計	¥27,193,568	支 出 計	¥27,193,568

事務局だより



本部事務局より主な活動報告と原稿募集のお願いです。

1. 役員会の開催

2021年度の役員会は一層の感染防止対策が必須となったコロナ禍中、対面での開催を見送り、11月にメールにて審議を行うこととなりました。メール役員会では総会の実施、次期役員について幹部会で審議された案が承認され、添付資料にて会務報告を行いました。その結果、2022年度愛媛大学理学同窓会総会は「紙面での総会」として、会誌第13号配付時に資料を同封、メール、はがき等で承認を受けることとなり、次期役員は原則2022年度の役員が継続することになりました。

2. 会報の発行

平成26年9月から東会長のもと、理学同窓会活動のさらなる活性化に努めて参りました。2年毎の会報発行も順調に進み、前号の会報12号は2021年（令和3年）2月に発行し新同窓生には卒業式に手渡すことができました。本同窓会の会員は約9,500名のうち連絡先が判明している3,282名に会報を送付しましたが、あて先不明で返送されてきたものが多数ありました。住所を変更された方は、メールまたは同封の住所変更ハガキにて同窓会にお知らせくださるようお願いいたします。住所変更ハガキは、2年間送料不要の手続きをしております。お手元に保存していただき、住所等の変更の際にご活用ください。また、2022年（令和4年）秋より会報第13号（本会報）発行の準備も進めてまいりました。

3. その他

2020年度（令和2年度）、2021年度（令和3年度）の卒業式当日に新会員（卒業生）約270名に記念品（同窓会名入りのエコバック）を贈り、住所連絡用の書類を渡して新しい住所が決まったら同窓会に連絡す

るようお願いしました。

この他に、2022年夏から冬にかけてホームページのリニューアルを行い、ホームページの更新、会員名簿の管理も随時行っています。

4. ホームページの原稿募集のお願い

理学同窓会のホームページ（<http://www.sci.ehime-u.ac.jp/rigaku>）では下記の2項目について同窓生の皆様からの原稿を募集します。投稿は郵便かメールでお願いいたします。なお、これらの原稿は同窓会報にも掲載させていただく場合があります。また、より多くの会員の近況を事務局で把握するために、同窓生による小規模な同窓会の開催やユニークな活動をしている会員の情報、さらに本同窓会員が職業や社会活動などにより受賞をしたというようなニュースなどもご存知の方は事務局へお知らせください。

《会合だより》

同窓生の皆様の会合開催等の原稿を募集しています。それぞれの学科で同期会等を多々開催されているとお聞きます。今後はこのような会を開かれた際には本部事務局にもご一報くだされば幸いです。ホームページに掲載させていただきたいと考えています。写真も歓迎します。

また、会の開催案内もホームページにより広報できると思いますので、是非ご活用ください。

《会員近況》

近況報告欄の原稿を募集します。同窓生の皆様の近況をお知らせください。写真つきも歓迎します。ふるってご投稿ください。お待ちしております。

送り先

宛 名：愛媛大学理学同窓会

住 所：〒790-8577 松山市文京町2-5

メール：rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

あとがき



今朝の空は久しぶりに一面の青空。1月の空だから薄い青、風もなく、冷気が心地よい。遠くに目を向けるとやや灰色にかすんで稜線が見える。日差しもやわらかで暖かく「春」を感じる。気温は低いが、すがすがしくて気持ちよい。

コロナ禍も3年が過ぎましたが、日々のニュースは新たな感染状況を伝える内容が中心です。しかし社会は今この環境に慣れた？のか、「それはそれ」なのか「だからどうした」という気分なのか、新型コロナウイルス感染の不安を覆うように、今まで停滞していた歩みを前に進めようと動きつつあります。また世界平和を脅かすロシアのウクライナ軍事侵攻も先行き不透明。やはり毎年同じ状況が続くとは限りません。「日々新」を改めて再認識します。

学生生活の貴重な数年間、「コロナウイルス」騒動の中、臨機応変に対応し卒業された皆さんには、就職また専門課程への進学のために例年にないご苦労があったことと思います。いや未だその渦中でしょうか。でも内向きではなく「変化への対応力を得た貴重な体験」として自信をもって前進してください。ちょうど今年の干支は「癸卯」、更なる飛躍を！

「丁寧道」とは書家、武田双雲さんの言葉。文字は丁寧に書く、言葉は正しく丁寧に使う、そして任された仕事は丁寧にきちんと処理をする。物事、雑にやれば「雑用」、些細なことでもていねいにやれば不思議に心は満たされる。もしかすると「丁寧である」ことは「幸せを感じる」ことの十分条件なのかも知れません。

本誌にはご退職の先生方の思いやご活躍ぶり、また理学部の現状や動向、さらには貴重な情報が発信されており興味深いものです。日頃からご支援ご協力をいただいている同窓生の皆様、理学部の更なる発展のため、お一人お一人のご活躍の状況や相互交流、体験談など様々な情報を本部事務局までお気軽にお寄せください。よろしく願いいたします。

(I.O)



愛媛大学理学同窓会 会報 第13号 (文理学部同窓会報より通算25号)

令和5年2月 発行 愛媛大学理学同窓会

〒790-8577 松山市文京町2-5 愛媛大学理学部内 FAX: 089-927-8424

メールアドレス: rigakudousoukai@sci.ehime-u.ac.jp

ホームページアドレス: <http://www.sci.ehime-u.ac.jp/rigaku>